

半求庵・阿部休巴

宮 武 慶 之

はじめに

新発田藩十代藩主である溝口直諒（翠濤／一七九九―一八五八。本稿では翠濤に統一。）は天保九年（一八三八）、家督を長男の直溥（一八一九―一八七四）に譲って隠居する。隠居後は江戸の上屋敷を離れ、木挽町の新発田藩中屋敷の幽清館で茶の湯を行うなどして過ごした。翠濤の茶の湯の師は新発田藩茶道の阿部老政（休巴、半求庵／一七八五―一八五三）である。新発田藩茶道は休巴ともう一人の田宮休斎（秋斎、半求庵／一七八八―一八六四）であった。休斎が老齢であり、その後の藩茶道が不在となることを危惧したことから、翠濤が休巴より石州流の皆伝を受け、石州怡溪派の茶の湯を受け継ぎ、翠濤は石州流怡溪派から一派をたて越後怡溪派をおこした。なお藩における茶の湯の職掌として茶堂、茶道、茶頭などと記載されるが本稿では茶道に統一する。

以上のように翠濤の茶の湯を研究する上で休巴の存在は重要であるものの、従来、行状については詳しくはない。『原色茶道大辞典』では「半求庵と号し、石州流伊佐派に立つて、越後新発田藩の茶頭をつとめた」と紹介される。『角川茶道大辞典』では「休巴は石州流伊佐派の茶道を御袋物師である藤重藤蔵（半田庵）から学び、ついで水村不言から皆伝を受け、新発田藩茶頭をつとめた。その門人には溝口景山、田宮休斎のほか、二本松藩主丹羽長富（一八〇三―一八六六）や同藩の家老や茶道がいる」と紹介されている。

以上のように系譜を知ることができるものの、休巴について具体的な行状については明らかにされていない。休巴の存在は茶の湯文化を隆盛させた翠濤の茶の湯を考える上でも重要であるのみならず、翠濤を茶の湯に導いた人物としても、また新発田藩に関係する人物の行状としても重要と位置付けられる。

筆者は休巴に関し『茶道雑誌石州（平成二十九年一月号）』で、翠濤による「阿部休巴寿像」および、休巴から皆伝を受けた翠濤が記念として削った茶杓二件について紹介した¹⁾。その後も調査を継続したところ、これらの作品は翠濤のみならず休巴自身の行状に大きく関係する作品であることが確認できた。そのため本稿では休巴の行状に着目し、新発田藩および溝口家の茶の湯における位置を明確にする。

1. 休巴について

休巴がいつの時点で新発田藩茶道となり、翠濤に皆伝を与えたのかは資料の不足から明らかにできていない。ただ『新発田藩史料（第一巻）』（一九八八年）には休巴に関する記

述を確認すると次の二箇所を確認できる。

一点目は文化二年（一八〇五）五月二十六日条であり次のような記述がある。

御坊主阿部休巴、祖母へ孝行家内和熟いたし候に付鳥目壹貫文被下²⁾

休巴二十一歳のとき、祖母への孝行と家内の和熟により、新発田藩から一貫目が褒賞として与えられた。注目すべき点は、文化二年の時点で茶道ではないことである。

二点目に文化十二年十二月二十日条には次のような記述がある。

御茶道格阿部休巴祖父、九拾余歳に相成候に付御目錄式百疋充被下³⁾

休巴三十一歳である。当時、休巴には九十余歳の祖父が存命であり、新発田藩から褒賞が与えられている。注目すべき点は当時、御茶道格になっている点である。そのため文化二年以降、同十二年の間に茶道に昇格していたことが確認できる。

ところで休巴没後の新発田藩の茶道について、『新発田市史』では塚野怡黙庵（生没年不詳）による『翠濤述』の写本を挙げており、引用すると次のようになる。

当流怡溪派茶道之義、我が家にて追々担当の者出て来り、近来休巴は伝統を得、巧者の事にて万端調べも行届き、家の為に相成、他の者迄も入門致し、伝統を免し候者も不少、坊主共も追々心懸、出精にて道を学び候者も出来悦び居候。然るに、先年同人死去以後は、伝統を受候ものとは秋斎一人に候得共、追々老衰に及び、門弟中仕込方も自然行届兼可申と存じ候へば、此後は茶道も自然に衰へ、又座敷向飾付物等之事迄も自然不調へに相成候へば、道具有りても其遣ひ方不案内にては、時により他へ対し外聞にも相成、歎は敷存候。されは坊主共之内に篤と心懸候者有りて、伝を得度存候も、他所より受継候ても宜敷候得共、当流の統を継ぎ巧者と云程之者も承り不申、然るに休巴没後何れも不案内にて、新に他より伝を受け候事は如何にも残念に存し、予未熟には候得共、休巴より伝統を得、一通りは不残調へ置き候恵得共、追々老年にも及び来年をも知れぬ事なれば、一刻も早く茶道共へ皆伝致し置候へば、伝統も絶へ不申事にて候⁴⁾。

休巴は新発田藩家中の者にも多くの弟子があつたようである。茶道坊主にも弟子があつた。休巴没後はその伝統を受け継ぐものが秋斎すなわち休斎であり、老年であつたことから不安であつたようである。そこで皆伝を休巴から受けた翠濤が藩の茶道に伝を伝え、その道統

を伝えていた事が知れる。

ところで東京大学史料編纂所が所蔵する『茶杓図譜』の上下二巻は奥書に「安政丙辰季春」とあることから安政三年（一八五六）に成立した。同書は溝口家家伝の茶杓について翠濤の時代に作成された。画は新発田藩の御用絵師であつた林勝麟（一八三二—一八八八）、茶杓筒墨書などの文字は翠濤によつて書き写される。同書において合致する茶杓では現在、北村美術館が所蔵する小堀遠州作共筒茶杓「式部卿様まいる」がある。現存する茶杓と図譜所載の茶杓を採寸したところ同寸であつたことから、本書は原寸大の模写図である⁵⁾。そのうち、皆伝のときに記念として削つた翠濤作の二件が所載する。

図版が原寸大であることから採寸して、茶杓の作行についてみると一件目（右）は全長一七・五^寸。節上は茶色、節下は黒色で薄作である。筒に銘はなく、印と花押のみが書かれる。二件目は（左）は全長一七・七^寸。白竹を用いており銘はなく筒に花押のみが書かれる（図一）。いずれの茶杓も權先はおおらかに撓められ、腰は穏やかである。『茶杓図譜』中には翠濤の自筆によつて以下のような記述がある。

右自作二ツは善く出来たるにハあらず其拙作なれとも皆伝のしるしに家にのこし置もの也

これらの茶杓二本は、翠濤が石州流茶道の皆伝を受けたときに記念に作成したことがわかる。翠濤が休巴から皆伝を受けた事で、新発田藩の茶の湯の道統が守られることとなり、その意味でも本茶杓の存在は重要である。

では休巴が皆伝を与えた者、もしくはその弟子についてはどのような人物がいたのであろうか。そこで東京大学史料編纂所が所蔵する『戯画肖像並略伝』に注目したい。同書は翠濤が親しくした人物の肖像とその略伝が書かれたものである。休巴の略伝中、次のような記述がある。

門人亦多し茶人系譜に載する所ハ皆伝の人々其後皆伝を得たるも亦少からすことに略す

そこで『茶人系譜大全』（一九二三年）では休巴の弟子には先述の翠濤のほか奥州二本松藩九代藩主丹羽長富（本来庵、宗趣）をはじめ同藩家老や茶道の名が確認できる⁶⁾。すなわち休巴は新発田藩以外に二本松藩の茶道ともなっている。この点について考えるとき休巴の師である藤重藤巖（生没年不詳）は伊佐幸琢（一六八四—一七四五）に茶を学んだ。また同書によれば幸琢の弟子で、藤巖と同門となるのが松平不昧（一七五一—一八一八）の

ほか二本松藩八代藩主丹羽長祥（一七八〇―一八一三）である。このことから二本松藩には伊佐派の茶の湯を学んだ縁故から、休巴が茶道として迎えられたものと考えられる。この点からも休巴による石州流の茶の湯は新発田藩や二本松藩に伝えられていたことがわかる。

二 阿部休巴寿像と賀壽の茶会

現在、個人が所蔵する「阿部休巴寿像」（図2）がある。翠濤の賛には

弘化丙午冬日翠濤庵之臨茶炉下倚座之体画焉 印

とある。本寿像は弘化三年（一八四六）に翠濤庵における翠濤の茶会に休巴が招かれたとき、描かれたことが判明する。休巴の姿はふくよかな顔と体が描かれ、十徳姿である。

翠濤による讃はもう一つ書かれており、

阿部休巴行年六十二歳春像

とある。このとき休巴六十二歳の姿である。また本紙上部には「石州流怡溪派茶道宗匠」とある。表装は行の表補であり、用いられる裂地は一文字と風帯が茶地寿文字半齒金欄、中廻が濃茶地二重蔓中唐草金欄、上下が萌地正紋雲鶴緞子である。一文字と風帯の寿の字は寿像に掛け合わせたものである。箱墨書は甲に翠濤目筆の定家様で

休巴寿像

と書かれ、また箱裏には翠濤の墨書により

翠濤庵自画之以與休巴 退翁證之（花押）

とある。

これらの画、讃、表具、箱書甲および裏は翠濤によって書かれ、休巴に贈られたと考えられる。なお、二つある讃のうち「阿部休巴行年六十二歳春像」の筆跡はもう一方と墨色および筆が異なること、春に書かれていることなどから、本幅の表具が完成し、箱書を認めた時期に書かれたと考えられる。

ところで先述の『戯画肖像並略伝』には半求庵寿像控（図3）が描かれる。同書の肖像

の上部には

弘化三年丙午十二月十六日写 印

六十三歳

半求庵寿像

とある。構図が個人蔵の寿像と同一であるため、翠濤に近侍した姿と捉えることができる。

このほか溝口家の記録では先述の『茶杓図譜』には休巴作の茶杓として共筒茶杓銘「腰蓑」が所載される(図4)。節より下の部分は竹皮を剥がされたものが自然に変化し、節上部分は樋があり侘びた竹を用いている。榎先も緩やかに締められ、華奢な印象を与える。筒背面には次のような墨書がある。

腰蓑 行年六十八翁 半求庵宗求(花押)

屋ふれ筒

為自用作之置

墨書から六十八歳のときに自身の持料として削られたようである。その後に溝口家が所蔵している点を考えるとき、没後に遺物としてもたらされたと考えられる。

本茶杓が削られた翌年、休巴は六十九歳となる。先述の『戯画肖像並略伝』には次のような記述がある。

嘉永六年癸丑の春六十九歳なれども古稀之賀の茶をもよぶし六会にいたり病にかゝりて没す時に六月二十五日也衆多の門人哀惜せさりなし怡漢派の宗匠八実にこれより世に絶たり

嘉永六年(一八五三)は休巴六十九歳であつたが繰り越し七十賀の茶会を催したことが知れる。六度の茶会を催したようであるが、その最中に発病し没した。この茶会について考えると、山本麻溪(一八四四—一九二三)による『古今茶湯集(第一巻)』(一九一七年)には阿部休巴七十賀の茶会が所収される。これは嘉永六年丑年二月二十九日正午の記録である。「席 三疊 七十賀会」とあり三疊の小間で催されたことが知れる。客は山本宗雄(一八一八—一八八〇)、関幸育(生没年不詳)、三木三之助(生没年不詳)、加藤祐悦(一八九一年没)、月岡万理(生没年不詳)である。

まず客となった人物について述べる。山本宗雄については野村瑞典による『石州流歴史と系譜』(一九八四年)によれば「山本宗雄(文政元年—明治十一年=一八一八—一八八〇)

は幼名を茂吉、又は長春といい、後に賢輔、諱を正意といった。明治七年から茶湯教授をするようになり、半改庵・瓢庵・一翁・如泡子と号した。宗雄は伊佐系の茶湯達人阿部休巴（越後新発田藩茶道）に学び、休巴没後はその門弟峰岸半古（半雪庵、堀田家茶堂）から皆伝を受け、その後五代幸琢に茶湯を伝授した⁷⁾とされる。なお宗雄の養子となつたのが麻溪である、このことから休巴七十賀茶会の記録は養父宗雄によるものと考えられる。

加藤祐悦については『福島県史（第二二巻）』（一九七二年）によれば「幼くして遠州流の茶儀を学び、天保年中茶道見習いとなる。次いで二本松藩の徒士小頭格茶道となる。嘉永年中に大番格、料十石を賜わる。茶道の名人として藩侯に近侍して寵遇特に厚く、給人格茶道橘山悦と並び称された。維新後は青田開墾地に住んだ⁸⁾とされる。先述の『茶人系譜』では休巴の門弟として二本松藩主、家老らが名を連ねており、その関係もあつて祐悦も参会したと考えられる。

詰客となつた月岡万理は松代藩の茶道で、貞享四年の『御役人帳』には奥坊主組頭とある⁹⁾。このほか関幸育、三木三之助については不詳であるが、客組みから休巴の門人や他藩の茶道と目される。

同書で紹介される休巴の賀寿茶会で使用された道具は次のようになる。

（茶席）

床	翠濤庵退翁筆賀寿二字
釜	寒雄作 丸形
炭斗	唐物藤組
灰器	半田
香合	染付瓢箪
水次	木地片口
羽箒	鶴
鈎	火筋
花入	石州宗関作宗源手紙添
花	紅乙女 貝母
茶入	高取焼 銘浮島
	箱小堀権十郎書付
袋	金欄
水指	信楽
茶杓	怡溪和尚作
茶碗	高麗

建水 面桶
 蓋置 引切
 (懷石)
 向 鮎こま／ わさびす
 飯
 温酒
 椀 たひらぎ 丸しんじょ わらび 吸口柚
 焼物 小鯛照焼
 吸物 鶴
 香物 奈良漬瓜
 茶銘 祝の白 森江詰
 菓子 寿の字餅牛皮製¹⁰⁾

茶会記を時系列に読み進めていくと次のようになる。初座となる三畳小間の床の間には翠濤による賀寿の二字が掛けられた。この点から本席で用いられた翠濤による賀寿の二文字は七十賀または以前の六十賀に際し書かれたと考えられる。釜は高崎寒雄(何代かは不詳)による丸形である。炭斗は唐物藤組、灰器は半田、香合は染付瓢箪、水次は木地片口、羽箒は鶴、鉢は火筋である。炭点前が終わると懷石となり向付は「鮎こま／」とあることから鮎を細かく切ったものと想像される。この鮎とは開催時期から考え、稚鮎と考えられる。これに山葵酢が合わされた。さらに温酒も出された。煮物椀は平貝を丸形の真摺にし、蕨と柚が添えられた。焼物は小鯛の照り焼き、吸物も鶴と祝意が示されている。香物は瓜の奈良漬であった。懷石を済ませると菓子が出される。菓子は牛皮製の餅で寿の字一焼印されたのであろうか¹⁾が出された。

後座の床の間には片桐石州(一六〇五—一六七三)の自作竹花入が掛けられ、花は紅乙女の椿と貝母が生けられた。点前座の周辺には信楽の水指を配し、茶入は高取焼銘浮島が金欄の袋にいられた。茶杓は怡溪宗悦(一六四四—一七一四)による作。茶碗は高麗で、茶銘は森江の詰による茶銘「祝の白」が振る舞われた。建水は木地の面桶で、蓋置は竹の引切である。茶杓の作者である怡溪宗悦は石州の高弟であり、これらの関係からも流祖となる石州に関係する道具組とさらには初座の床の間に翠濤の掛物をかけるところに重きが置かれている。

ここで先述の『戯画肖像並略伝』に着目すると次のような記述がある。

彼の肖像存命の中に与ふる所表具して賀の茶会前間にかけたる

記述から賀の茶会とは先述の七十賀茶会をさし、この茶会の前間すなわち寄付または待合の掛物として用いられていたことが知れ、個人蔵の寿像と同定される。このことから休巴の賀寿茶会では前間と本席の掛物が翠濤による書画であったことが知れ、両者の深い交流が確認できる。

三 江戸での休巴の活動

茶道としての職掌として、茶会の準備や茶の湯道具の管理もあつたと考えられる。休巴が溝口家ではどのような活動を行なっていたのか、同家の文書史料からみていきたい。

1) 抹茶の命銘の取り次ぎ

新発田藩の中屋敷は江戸木挽町にあつた。ここは別に幽清館ともいい茶室等が点在し、翠濤は隠居後、茶の湯を嗜み過ごした。幽清館での雑記が現在、東京大学史料編纂所が所蔵する『幽清館雑記』である。この雑記は雑記十二巻(ただし第九巻は欠)と『千貫樹記』、『小浦浪記』からなる。これらの筆跡をみると翠濤自身の筆記または近習の家臣による筆録である。同書(巻十)には次のような記述がある。

○同^{弘化四年}年夏森江惣左衛門が茶銘願候二付同年
十一月朔日日附二して十一月十六日納戸へ相渡し茶
道の方先方へ相達す片桐石見守貞昌殿之書体
にならふ写し左にするす

菊乃白

右濃茶銘如件

翠濤庵(花押)

弘化四丁未年十一月朔日

森江惣左衛門との

弘化四年、宇治大鳳寺村の茶師森江惣左衛門(重親ノ生没年不詳)が翠濤に茶銘を願った。同年十一月朔日付で「菊の白」として、納戸を通して書き与えたことがわかる。この時書体は片桐石州の筆跡に習ったものであつた。茶銘を記した入日記について同書では次のような記述がある。

宮林有斎が茶銘被下遣候様願候二付為御風味

差下し候、入日記同年七月二十九日阿部休巴が差出

左にしるす

御茶入日記

一 極上半式袋

壹枚ノ

一 御詰

以上

未六月吉日 森江（花押）

茶壺に詰められた茶の品目を茶師が記した入日記は同年七月二十九日に休巴によつて差し出されたことがわかる。極上半とは濃茶用の抹茶が碾茶の状態で二袋、薄茶用の茶葉が詰められていたことがわかる。その日付は弘化四年六月吉日となっている。この点から森江および宮林有斎（生没年不詳）が茶銘を乞う過程で休巴が関与しており、休巴の職掌が茶の湯の点前指南以外にもあったことが知れる。特に有斎が所望した茶銘については後述する。

同書には森江が休巴に宛てた書状の写しが所載され、次のような記述がある。

一筆啓上仕候甚暑之節御座候得共

両殿様益御機嫌能被為遊御座恐悦至極奉候作

次二貴所様弥御壯健被成御勤仕目出度御儀奉存候

然若兼而御願申上置候御茶銘之儀当春格

別二念入漸々此節出来仕候二付存御試半式袋奉

差上候何卒御風味之上御茶銘被下置候ハ

外聞至極難有仕合奉存候何分宜様御取成之

程奉願上候先ハ右御願と暑中御伺申上度如此

御座候恐惶謹言

森江惣左衛門

重親（花押）

六月十一日

阿部休巴様

忝人々御中

日付は時期から考えて弘化四年六月十一日。差出人は森江重親である。両殿様とあるのは、すでに翠濤が隠居した身であり、藩主は息子で新発田藩十一代藩主となつた溝口直溥

(一八一九―一八七四)である。重親は以前から翠濤に茶銘を乞うことを休巴に相談していたようである。同年春に格別なる茶ができたので、賞味することを求めており、茶銘をもらうことができれば世間の評判になると述べている。つまり取り次ぎ役としての休巴の活動が確認できる。先述の宇治大鳳寺村の茶師である有斎が茶銘を所望した一件について同書には次のような記述がある。

○嘉永二年己酉十二月廿五日茶銘を付る尤十五日

日附にして休巴に相渡す

梅乃白

右濃茶銘如件

翠濤庵(花押)

嘉永二己酉年十二月十五日

宮林有斎老

嘉永二年十二月二十五日、休巴を介し有斎に茶銘を与えたことが知れる。この茶銘は「梅の白」といい日付は十五日付となっている。

以上のことから休巴は翠濤の茶の湯で使用する茶の選定や、茶師との交渉に大きく関与していたことがわかる。これらの茶師の主要取引先は森江惣左衛門の場合、高槻永井家、宮林有斎の場合、郡山柳澤家、備中木下家であった¹¹⁾。森江と宮林の両者が茶銘を求めていることから、茶の湯で著名であった翠濤の命銘による茶を所望したことは江戸という地で相応に需要があったものと考えられ、さらには新発田藩または翠濤自身の茶の湯で使用する茶としての購入規模は小さいにせよ溝口家も取引相手であったと考えられる。そのためこのような活動の中で休巴は取り次ぎ役として活動した。

2) 吉村観阿との関係

茶銘に関する取り次ぎ以外では翠濤の美術品収集にも関与しているようである。翠濤による和漢の絵画に関する借覧または拝見の記録で現在、東京大学史料編纂所が所蔵する『和漢画図筆記』には中国明代末期に活躍し、書画に優れた董其昌(一五五五―一六三六)による画賛の一軸について次のような記述がある。

○絹地豎幅日描山水 董其昌 画賛 一軸

右辰十二月二日休巴に出入美は観阿方に取出る由

代金二十両之由申す一覽之事先日出る分よりは宜敷

相見候と申すなれとも当吟味申付其後返す<sup>先別出分
も別手也</sup>

翠濤の元に董其昌の白描による山水図が休巴によって持ち込まれた。同書中の辰とは、ほかの記述から文政三年と判断される。実はこの作品は江戸の町人好数寄者である吉村観阿（白醉庵／一七六五―一八四八）が見出し、休巴の元に持ち込まれた作品であった。観阿が溝口家に出入りし始めたのは文政三年か四年¹²⁾ころである。そのため取り次ぎ役が休巴であったことが知れる。同書に所載される山水図の代金は二十両である。翠濤の元には過日にも董其昌による作品が持ち込まれたようであるが、それよりは出来は良かったようである。しかし結局は返却したことが述べられている。この記述から、休巴と観阿の関係性を伺うことができる。

ここで現在、福岡東洋陶磁美術館が所蔵する小堀宗中（一七八六―一八六七）による「松」（図5）に注目したい。本作品については『知られざる目利き 白醉庵吉村観阿』（二〇二〇年）で紹介したが改めて紹介する¹³⁾。本書は松と大書し、次のような歌一首が書かれている。

君かよにくらへていはと松やまのまつ葉かすはすくなくかりけり

この歌は『千載和歌集（巻第十）』にみられ、その詞書には「俊綱朝臣、さぬきのかみにまかれりける時、祝の心をよめる」橘俊綱（一〇二八―一〇九四）による歌であることが知れる。

落款には

阿部氏之應需 宗中

とあり、阿部氏の求めに応じて書かれたことがわかる。また軸を収納する箱の甲には

松之一字並和哥 宗中公筆

半求庵所持

と隸書体で書かれている。半求庵とは休巴の号であり、本墨書も休巴自身によるものである。すなわち本紙に書かれた阿部氏とは休巴のことであることが判明する。又箱裏には

八十翁 物外

とあり、これは観阿の別号であり、観阿八十歳である。この点から休巴が還暦に際し観阿を介して宗中に依頼して書かれた作品であると判断される。このことから休巴六十賀に際しても記念の茶会が開催され、翠濤や観阿などが招かれたと考えられる。

四 むすび

本稿では休巴の溝口家における茶道としての職掌および行状について論じた。休巴のうち阿部家は養子であった休昧（生没年不詳）が継ぐこととなる。ここで新発田藩の絵師であった林閑斎（隣潮、由澄／一七六九—一八四三）の肖像画及び略伝について現在、東京大学史料編纂所が所蔵する『由澄肖像 附畧伝閑斎記並跋』から行状が知れる。休巴および休昧について同書には次のような記述がある。

三男敬修^{休昧}為阿部老政^{休巴}之義子学其茶道悉得其秘傳足繼義父之職業也。然早夭^{二十歲}可惜哉

隣潮の三男敬修が、休巴の養子すなわち休昧であったことが判明する。休昧は休巴の茶の湯を学び、後を継ぐ人物であったが二十七歳という若さで没した。そのため休巴の道統も途絶えたこととなり、『茶人系譜大全』で休昧の名は記載されるのも、その行状が夭折による理由とわかる。

休巴の溝口家における職掌として抹茶の茶銘や道具に関する取り次ぎを行なっていたことがわかった。これらの茶師で確認できたのは翠濤に茶銘を求めた森江惣左衛門と宮林有斎である。また休巴と森江惣左衛門をめぐっては、休巴七十賀の茶会で森江の話による「祝の白」を用いている点からも関係性がうかがわれる。溝口家とこれらの茶師との関係は、明治二十年（一八八七）三月付の長井貞甫（生没年不詳）、宮林有斎（生没年不詳）、森江惣左衛門（生没年不詳）ら三名の連名による次の書状にも関係すると思われる。

願上げ奉り候口上書

- 一、私共旧来御館入仰せ付けられ、年々江戸表二おい
て御茶御用仰せ付けられ、御蔭ヲ以て相続仕り有
難き仕合わせ存じに奉り候、御余光ヲ以て、是迄
出府業用相営ミ罷り在り候処、今般御一新二付、
旧幕府茶用余沢取失ひ、是迄の様に東京出張の甲
斐もこれ無き成り行き難渋仕り候、これに依り恐
れ乍ら御表御領分中御茶の事、三人の者一手二

御任せ仰せ付けられ下し置かれ候様、歎願奉り候、
願いの通り御許容下し置かれ候は、三人の内年々
御国え出張仕り御用御茶の儀は勿論、御領内御茶
用弁え滞り無く相勤め申し度く存じ奉り候、尤も
御茶出格入念に吟味仕り他製相劣らざる様、丹精
仕る可く御聞済み下し置かれ候上は、御茶荷物海
上運送の分、御国御用物の差し絵符御許し下され、
且つ銘々共往来の節は、本馬菅正・人足式人御聞
済み願ひ奉り候、願いの通り御許容下し置かれ候
は、御由緒の規矩相建て業用手弘二相営み申す可
しと外聞御座候儀、有難き仕合わせに存じ奉る可
く候、宜しく御沙汰頼み申し上げ奉り候、以上

明治貳年巳三月

御館入御茶師

長井 貞甫印

宮林 有齋印

森江 惣左衛門印

新発田

御役人中様¹⁴⁾

特に有齋と惣左衛門は翠濤の時代からの縁故を頼りに新発田藩での茶の独占を三者で一手に引き受けさせるように求めた文書である。そのきつかけとなつたのは休巴による取り次ぎにより翠濤から茶銘を命銘されたことが影響していると判断される。

休巴をめぐるのは観阿との関係も明らかにでき、特に休巴還暦に際しては観阿を介して宗中に「松」の揮毫を依頼している。宗中は翠濤とも親しくし、翠濤を中心とする茶の湯文化の中で休巴自身も茶道という立場でありながら、新発田藩や二本松藩との関係からも江戸において茶の湯を通じ多くの交流ができた。以上の点から休巴は新発田藩の茶道としてのみならず石州流怡溪派の中でも重要な人物であると結論することができる。

謝辞

本稿執筆にあたり調査にご協力いただきました東京大学史料編纂所、福岡東洋陶磁美術館、個人の御所蔵家、同志社大学今出川図書館に深謝申し上げます。

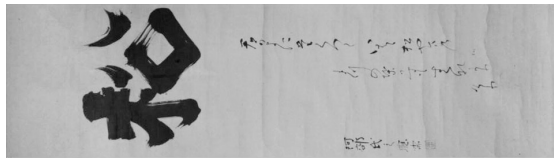


図5 小堀宗中筆「和」
(福岡東洋陶磁美術館蔵)

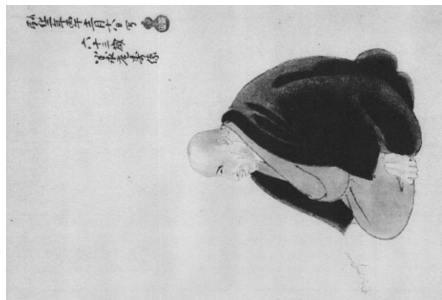


図3 溝口翠濤筆「半求庵寿像控」
(『戲面肖像並略伝』より)

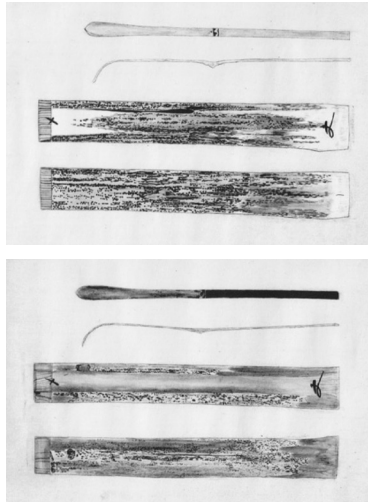


図1 溝口翠濤作茶杓二件
(『茶杓図譜』より)

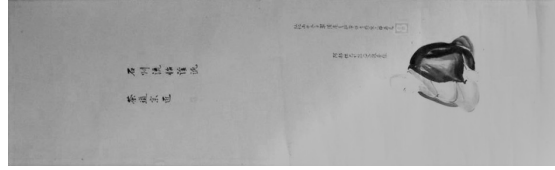


図2 溝口翠濤筆「阿部休巴寿像」
(個人蔵)

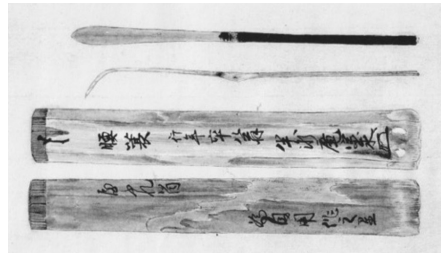


図4 阿部休巴共筒茶杓銘「腰囊」
(『茶杓図譜』より)

註

- 1) 宮武慶之「翠濤と休巴」『茶道雑誌石州』平成二十九年一月号、茶道雑誌石州社、二〇一七年、六〇―六四頁。
- 2) 新発田市史編纂委員会編『新発田藩史料』第二巻、国書刊行会、一九八八年、二二七頁。
- 3) 前掲註2)、『新発田藩史料』第一巻、二三八頁。
- 4) 新発田市史編纂委員会編『新発田市史』上巻、新発田市、一九八〇年、六六〇頁。
- 5) 宮武慶之「新発田御道具帳にみる溝口家旧蔵の茶道具」、『文化情報学』第九巻第二号、同志社大学文化情報学会、二〇一四年、五九―一二二頁。
- 6) 柴山進行編『茶人系譜大全』川瀬書店、一九三三年、一二九―一三〇頁。
同書によれば休巴の門人中、丹羽家の家臣では吉川有佐（半鐘庵）、丹羽備中昌明（半圭庵、半禪庵、宗白）、丹羽丹波富訓（松濤庵、風水軒、宗漢）、丹羽四郎国敬（古招庵）。以上のほか堀田家茶道の峯岸宗古（半雪庵）、伊藤家茶道の村岡榮知（半風庵）、町人では三村多吉（半書庵）、江戸の町人本多吉兵衛（半月庵）らが確認できる。
- 7) 野村瑞典『石州流歴史と系譜』光村推古書院、一九八四年、一二二頁。
宗雄の父について同書では「宗雄の父も奥坊主として仕えており竹翁といっていた。その仕事柄、茶湯も石州系であつたと思う」と野村は指摘している。
- 8) 福島県編『福島県史』第二二巻、福島県、一九七二年、一三七頁。
- 9) 田中誠三郎『真田一族と家臣団 その系譜をさぐる』信濃路、一九七九年、二二六頁。
同書によれば松代藩の諸役と役人名中、「奥坊主組頭 月岡万里」とある。
- 10) 山本寛、木全宗儀編『古今茶湯集』第一巻、木全宗八、一九一七年、二四―二五。
- 11) 林屋辰三郎ほか編『宇治市史』第三巻、宇治市役所、一九七六年、一四七頁。
- 12) 宮武慶之『知られざる目利き 白酔庵吉村観阿』淡交社、二〇二〇年、九六―九七頁
- 13) 前掲註12) 宮武慶之『知られざる目利き 白酔庵吉村観阿』。二三―三四頁。
- 14) 林屋辰三郎ほか編『宇治市史』第六巻、宇治市役所、一九八一年、一六九頁。